

# びわこの 考湖学

第2部

7

近江大津宮の周辺には、前回紹介した崇福寺の他に、南滋賀町廃寺や園城寺前身寺院、穴太廃寺などの白鳳期の寺院が存在します。これらは大津宮にかかわって建立された官営の寺院です。さらに、近江には渡来人や有力者たちが建立した数多くの氏寺が存在していました。

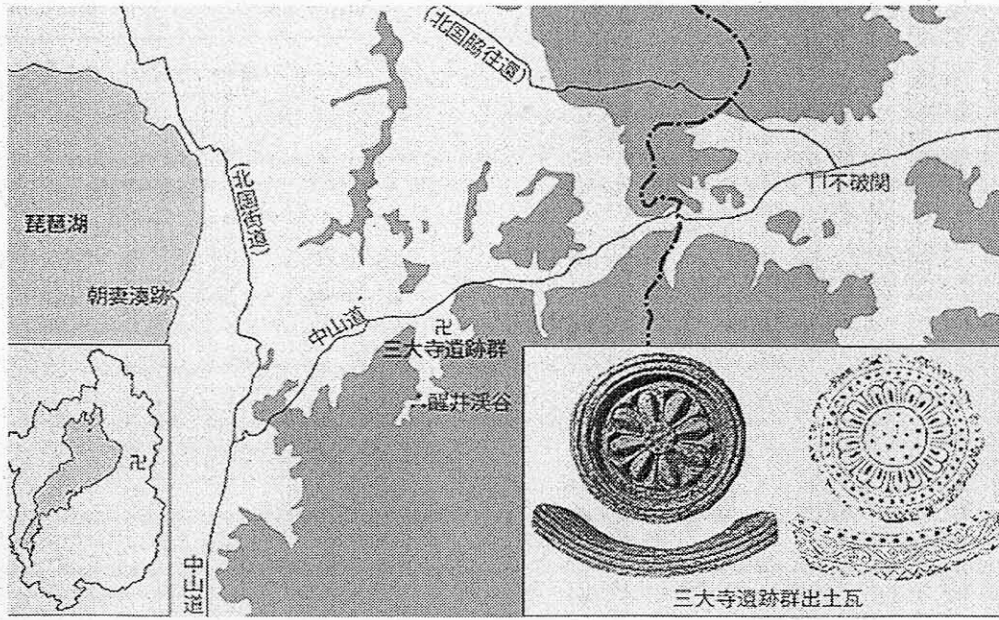
7世紀後半の白鳳時代に建立されたと考えられる寺院跡は、約60力寺知られていますが、これは、現在近江で知られている寺院跡の約8割に相当します。

その白鳳寺院のひとつに、名勝醒井溪谷への入り口にあたる米原市枝折に所在する三大寺廃寺があります。三大寺の名称は、付近に随泉寺、福遊寺、多聞寺などの寺院が存在していたとの伝承によるものです。明治36年に現在の醒井小学校の改築工事の際に、奈良県本薬師寺と同じ瓦を含む多量の瓦が出土したことで広く知られるようになりまし

た。その後、小学校付近の小字寺尾だけでなく、枝折川を挟んで南に250m離れた小字塚原でも瓦が出土することがわかりました。

昭和57年度に小字塚原において行われた発掘調査では、東西24m・南北21mの方形基壇がみつかりました。基壇は後世の削平を受けていて、建物の礎石などは残っていませんでしたが、残存部分から自然地形を整形したのち版築で構築されていたことがわかりました。

## 米原・三大寺遺跡



三大寺遺跡と出土した瓦

と推定されています。これらの建物の性格は、どのように理解できるのでしょうか。

西暦672年6月におこった壬申の乱では、近江の各地が激戦の舞台となりました。「息長横川」「犬上川の濱」「野洲川の濱」「勢多橋」「粟津」など、琵琶湖に流れ込む川や琵琶湖のほとりが戦場となった記述が『日本書

紀』に見えます。壬申の乱で勝利した天武天皇・持統天皇は、律令国家を目指す中で、仏教を国家仏教として政治体制に組み込む政策を推し進めます。この仏教

## 激動の時代、短期間で廃絶

振興策に基づいて、持統6年(692)には諸国に548力寺もの私寺(氏寺)が建立された『扶桑略記』に記されています。

三大寺廃寺が位置する米原市醒井付近は、「息長横川」と推定され、また、「犬上川の濱」には彦根市高宮廃寺跡、「野洲川の濱」には草津市花摘寺跡、「勢多橋」「粟津」には大津市国昌寺跡が建立されています。これらは694年に遷都された藤原宮や藤原京内に造営された本薬師寺と同じ瓦を用いられている寺院跡なのです。

しかし、『続日本紀』元正天皇霊亀2年(716)5月条には諸国の寺院が荒廃していった様子が記されています。三大寺廃寺の創建と廃絶は、まさにこの状況を示しているものと考えられるのです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大崎康文)